

現代における定時制高校の役割（Ⅲ）

——2009 年定時制・通信制全国調査より——

○大谷直史（鳥取大学） 柿内真紀（鳥取大学） 太田美幸（立教大学）

1. はじめに

これまで発表者らは、定時制高校の役割が、勤労青少年の後期中等教育の機会保障から低学力・反社会的な傾向をもつ青少年の学びの場へ、さらに不登校や発達障がい等を抱える青少年の学びの場へと拡張・変質してきたことを述べてきた¹⁾。

このような変化は、定時制高校の改革と相互规定的に進められてきた。90 年代以降の定時制高校改革において登場した、昼夜間多部制の高校は、現代に適応した「亜流」化を制度的に追認しているとも言える。むしろその「亜流」化は、60 年代後半以降におけるそれではなく、新たな周辺による全日制の「亜流」化である。一言でいえば、かつての周辺とは反社会的な傾向をもつ青少年であったが、現在の周辺は不登校や発達障がい、従来の非行の枠組みでとらえきれない脱社会的な傾向をもった青少年である。

本報告では、発表者らが 2009 年 8 月に行った全国調査（回収数：定時制高校 370 校（回収率 50.9%）、通信制高校 69 校（同 34.5%））を用いて、各高校が抱える課題、生徒認識、役割認識を明らかにし、多様化・複雑化する定時制・通信制高校の役割について検討する。とりわけ、新しいタイプ（昼夜間 3 部制等）の定時制高校と従来からのタイプの定時制高校（夜間 1 部制、昼間 1 部制）では、教員の生徒の样子の認識、定時制高校の役割意識が異なることを示す。

しかしながらこの試みは思いのほか困難を抱えている。というのも、定時制高校は、各地域の特殊な事情に由来する困難を引き受ける宿命にあり、多部制であることがすなわちどのような高校であるかを示すことはできない。同時期に改革された多部制の高校であったとしても、（怠学傾向ではない）不登校に特化する学校や全日制と実質的に（時には呼び方の上でも）変わらない学校、そして多様な問題を抱えた生徒がいる場合など、

地域のおかれた条件や近隣の学校の状況などによって多様である。また従来型の夜間 1 部制・昼間 1 部制の高校が、そのままの形で多様な生徒を抱えていることも少なくない。問題はそれぞれの定時制高校のこういった側面が、生徒の在り方を規定しているのか（正確には教員の生徒認識の在り方を規定しているのか）を明らかにすることである。

なお主な調査項目は次の通りである。

学校の概要、入学者選抜の基準、生徒の状況（就労、不登校、中退、留年）、不登校経験者率、中退経験者率、生徒の様子、生徒指導・単位認定の運用の弾力性、進路状況、学校の社会的役割

2. 調査結果

1) 定時制高校の形態の違い

まず調査から得られた多部制の特徴を列挙する。なおここで言う多部制とは、昼間 2 部制、昼夜間 1 部制、昼夜間 2 部制、昼夜間 3 部制を含むものであり、計 69 校（18%）である（昼間 1 部制は 27 校（7%）、夜間 1 部制は 287 校（75%））。

- ①普通科が 8 割以上（他は 6 割強）
- ②単位制が 75%（他は 3 割強）
- ③単独校が 42%（昼 59%、夜 12%）で、いわゆる全日制との併置校は 20%（昼 33%、夜 87%）
- ④所在地の人口は 10～50 万人が 46%（昼は 5 万人以下が 52%）
- ⑤90 年代以降の設立が 36%（昼は 15%、夜は 3%）
- ⑥90 年代以降に大きな改革を経験している学校が 54%（昼は 15%、夜は 18%）
- ⑦課程内 3 修が 65%で可能（昼は 59%、夜は 11%）

以上多部制の学校は、90 年代以降に改革がなされた普通科・単位制・単独校というイメージを持つことが、さしあたり可能である。

表 1 は入学者の不登校経験者割合、表 2 は中退経験者割合、表 3 は就労者割合を形態別に示したものである。ここからは多部制において不登校経験者・中退経験者が多く、就労者が少ないことが分かる。一方で専修学校を含む進学率は最も高く、就職率は最も低い。

このことは、多部制定時制高校が多様な周辺の生徒を抱えていることを示唆している。

表1 学校形態別中学時の不登校経験者 (%)

	ほとんどない	20%未満	20～40%未満	40～60%未満	60～80%未満	80%以上	無回答
昼間1部制	7	15	37	26	7	0	7
多部制	1	12	25	43	12	0	7
夜間1部制	1	16	36	28	9	2	8

表2 学校形態別中退経験者 (%)

	ほとんどない	20%未満	20～40%未満	40～60%未満	60～80%未満	80%以上	無回答
昼間1部制	63	26	4	4	0	0	7
多部制	22	49	20	1	0	0	7
夜間1部制	13	59	16	3	0	0	8

表3 学校形態別就労者 (%)

	0%	20%未満	20～40%未満	40～60%未満	60～80%未満	80%以上	無回答
昼間1部制	30	15	15	22	4	7	7
多部制	0	7	46	28	10	1	7
夜間1部制	0	1	15	51	25	6	2

2) 生徒の様子の認識

表4は生徒の様子について尋ねた28項目

表4 生徒の様子の認識の因子分析結果

	反社会	非社会	脱社会	障がい	順社会
校則を守らない生徒が多い	.852	-.063	-.070	-.050	.004
教師への反抗心の強い生徒が多い	.823	-.033	-.032	.018	.040
授業中、私語をする生徒が多い	.728	.075	-.095	-.108	-.005
授業をサボる生徒が多い	.713	.020	-.056	.017	-.071
教師とのトラブルが多い	.688	-.032	.235	-.004	.055
友人関係のトラブル(いじめ等)が多い	.447	.090	.293	.055	.056
中途退学をする生徒が多い	.428	.051	-.019	.130	-.050
友人関係で傷ついた経験を持つ生徒が多い	-.073	.842	.097	-.090	.065
他の生徒となかなか馴染めない生徒が多い	.041	.723	-.027	.034	-.080
幼稚さの残っている生徒が多い	.157	.404	-.120	.166	-.026
生徒の自傷行為がある	-.127	.075	.852	-.010	-.020
性的トラブルに巻き込まれている生徒がいる	.052	-.069	.759	.027	-.030
発達障がいを持つ生徒が比較的いる	-.019	.038	-.071	.901	.023
知的障がいを持つ生徒が比較的いる	-.030	-.045	.123	.726	-.010
学校行事に熱心に取り組む生徒が多い	-.081	.057	-.041	.026	.839
部活動に熱心に取り組む生徒が多い	.071	-.068	-.008	-.010	.710
α係数	0.857	0.708	0.755	0.787	0.744
因子相関行列					
反社会	1	0.307	0.380	0.396	-0.351
非社会		1	0.543	0.509	-0.167
脱社会			1	0.501	-0.141
障がい				1	-0.141

表5 分散分析結果

	非社会				脱社会				障がい			
	校数	平均	標準偏差	F値	校数	平均	標準偏差	F値	校数	平均	標準偏差	F値
昼間1部制	26	-0.189	1.06	5.35***	26	-0.448	0.890	5.17***	26	-0.027	1.10	3.14**
多部制	66	0.317	0.894		66	0.219	0.808		66	0.255	0.925	
夜間1部制	280	-0.057	0.874		280	-0.010	0.925		280	-0.158	0.891	

多重比較はBonferroni法を用い、有意差(p<0.05)があるペアは括弧で示した。

*p<0.05 **p<0.01 ***p<0.001

※本研究は、平成19～21年度科学研究費補助金「地域社会の変容下における定時制高等学校の危機と対応過程」代表者：高口明久→柿内真紀によって行われた。

を用いて、探索的因子分析を行った結果である。固有値1以上、及びスクリープロットにより5つの因子を抽出した。第1因子から反社会、非社会、脱社会、障がい、順社会と命名した。この因子得点を従属変数とし、一元配置分散分析を行った結果が表5であり、多部制であることが、非社会、脱社会、障がいのある生徒が多いという認識をもたらしめていることが確認できる。

3. 課題

はじめに述べたとおり、定時制高校における生徒の多様化は、多部制であるという理由のみに起因することではない。今後様々な条件を加味して分析を進めることで、多様化(の認識)を規定する要因を明らかにすることが必要であるとともに、多様化を前にしてどのような方略(本調査では指導の柔軟性等で把握)が採用されているのかを考察することが課題である。

1) 柿内真紀・大谷直史・太田美幸「現代における定時制高校の役割」『鳥取大学生涯教育総合センター研究紀要』第6号、2010年。